

研 究 主 題

「未来へとたくましく生きる体づくりができる子どもの育成をめざして」

～運動を通して仲間とのかかわり合いの楽しさが感じられる体育学習をめざして～

1 研究主題について

児童の環境が変わり、様々な問題が指摘される中、体育の学習では、「友だちと共に体を動かすことが楽しい」という経験を積ませることが重要であると考え、西伯郡は、「未来へとたくましく生きる体づくりができる子どもの育成をめざして」～運動を通して仲間とのかかわり合いの楽しさが感じられる体育学習をめざして～と設定した。

2 研究の実際

○学習内容の明確化

「西伯スタンダード」を各学校の体育学習の年間指導計画に組み込み、6か年を意識した指導を行っていく。(系統表の活用)

○学習過程の工夫

「わかる」と「できる」の一致をめざした指導。得た知識・技能を次に「生かす・挑戦する」

○効果的な指導

場の設定。教具の開発や工夫。ICTの活用(iPAD、動画など)

○言語活動の充実

児童相互で動きを見合ったり、教えあったりする場を意識しながら設ける。教師が引き出したい授業でのねらいにつながるキーワードを児童自身で話せるような工夫もしていく。

○形成的授業評価やデータを生かした授業分析

ふり返りカードやアンケートを有効に活用し、次の授業につなげていく。

3 具体的な取り組み

6 / 2 3 西伯郡小学校研究会体育部会理事会

研究の方向性 指導案の検討会

7 / 7 授業研究会(提案授業)

大山町立大山西小学校 細田 祐樹 教諭(水泳)

8 / 2 西伯郡小学校研究会体育部会(ベースボール型のゲームの実技講習会)

10 / 1 7 授業研究会

伯耆町立岸本小学校 大田 優 教諭(はばとび)

11 / 2 4 全国女子体育研究発表会

伯耆町立岸本小学校 三輪 仁志 教諭(表現運動)

4 来年度に向けて

来年度は中四国大会(岡山大会)で水泳領域の発表が担当になっている。各校での実践を持ち寄りながら西伯郡としての研究を深められるよう、準備を行っていきたい。

第3学年「走・跳の運動」の実践を通して

伯耆町立岸本小学校 大田 優 小林 裕香 荒金 圭太

1 はじめに

(1) 運動の持つ特性

はばとびは短い助走から踏み切り、着地するまでの距離を競い合う運動である。距離を伸ばすためには、助走から踏み切りまでのリズム、踏み切るときの力強さが要求される。また、学習指導要領では、「体を巧みに操作しながら、合理的で心地よい動きを身に付けるとともに、仲間と速さや高さ・距離を競い合ったり、自己の目指す記録を達成したりすることの楽しさや喜びを味わうことの運動である。」ことが述べられている。低学年（1・2年生）の運動遊びの「とびっこあそび」などで、いろいろな場を跳ぶ経験をしており、「調子よく跳ぶ」という感覚は少しずつ養われている。今回の中学年の（3・4年生）の段階では、短い助走（3～5歩程度）から踏み切って跳ぶ感覚を養い、高学年（5・6年生）の走り幅跳びにつなげていきたい。これまで以上に遠くへ跳ぶことを楽しんだり、児童同士で動きを見合ったり、良いところを伝え合ったりし、児童同士がかかわりの楽しさを感じることができると考える。

(2) 児童の実態

本学年の児童は、男子28名、女子25名、計53名が在籍している。比較的体を動かすことが好きで休憩時間に、運動場でボール遊びやごっこ遊びをして過ごしている。また、児童同士で活動することも好きで、一緒に楽しく過ごそうという思いを持って行動している様子が見られる。運動が得意な児童、苦手な児童がお互いに見合ったり、教え合ったりする機会を設け、「できるようになって楽しい。」「教えてもらったことによってできるようになって楽しい。」「教えたことによって友だちができるようになって楽しい。」という思いを感じられる授業づくりに取り組んできた。今回の単元でも「調子よく跳べるようになって楽しい。」という児童が増えていくようにお互いがどこを見てどう助言をしたらよいかを理解させながら学習を進めていきたい。



2 実践について

(1) 単元の目標

- ①運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。（態度）
- ②自己の能力に適した課題を持ち、動きを身に付けるための活動や競争の仕方を工夫することができるようにする。（思考・判断）
- ③短い助走から踏み切って跳ぶことができるようにする。（技能）

(2) 指導について

2年時までに学習した「とびっこあそび」の内容をサーキット形式にして少しずつ動きを慣らしていく。次に踏切位置を意識させた跳び方へ移行し、短い助走から踏切までのタイミングをどのようにしたらよいか考えさせたい。「トン・ト・トン」や「ポン・ポン・ポン」などの助走や踏切時の児童のタイミングやリズムの取り方をオノマトペを有効に使いながら、イメージを全体に広めていきたい。腕、足の振り上げ方にも着目させ、バランスよく跳べるように支援していきたい。競争の仕方も丁寧に教えながら、ペア、グループでの競争にも興味を持たせ、遠くに心地よく跳ぶ感覚を味わわせたい。

3 授業の実際（5／6時間目の授業から）

(1) 目標

- 跳の運動の動きを身に付けるための練習の仕方を知り、自分の力に応じた練習方法や練習の場を選ぶことができるようにする。(思考・判断)
- 短い助走から調子よく踏み切って遠くへ跳ぶことができるようにする。(技能)

(2) 準備

ホワイトボード 学習や運動の図や絵 カラーコーン 音源 学習カード

(3) 学習内容

- ①集合、整列、あいさつ
- ②準備運動
- ③めあての確認
- ④チーム練習（その1）段ボール箱とび
- ⑤話し合いの場（ポイントに沿って跳んでいる児童をピックアップ）
- ⑥チーム練習（その2）段ボール箱とび、その1よりもレベルアップしたもの
- ⑦振り返り

4 成果と課題

児童は「片足で踏み切る」「両足で着地する」「強く踏み切る」など各学習のその時間のポイントに気を付けながら活動に取り組んでいた。また、「ト・トン」「トン・ト・トン」など児童同士で積極的に声を掛け合っていた。お互いに見合って、助言しながら上達していくことに手ごたえを感じている様子であった。振り返りの場でも、ポイントに気を付けた言葉や友だちのよいところを取り上げた発言もあり、学習への意欲付けにもつながって行けたと思う。

今後に向けて、遠くへ跳ぶためのひざの上げ方、腕の振り方などの技術的な面の児童とそれに伴う場の設定、児童同士が話し合いをするポイントをもっと精査し、児童の運動量の確保と運動能力の向上に努めていきたい。



「わたしたちの体育」を活用した実践事例
～3年生「はばとび」の学習～

伯耆町立岸本小学校 大田 優

1 はじめに

はばとびは短い助走から踏み切り、着地するまでの距離を競い合う運動である。距離を伸ばすためには、助走から踏み切りまでのリズム、踏み切るときの力強さが要求される。また、学習指導要領では、「体を巧みに操作しながら、合理的で心地よい動きを身に付けるとともに、仲間と速さや高さ・距離を競い合ったり、自己の目指す記録を達成したりすることの楽しさや喜びを味わうことの運動である。」ことが述べられている。

「わたしたちの体育」は、はばとびに必要な基礎・基本的な動きの習得のための豊富な練習方法や、それらを活用する運動例が紹介されている。今回の実践では、体育の授業の前日に学習内容を伝え、自分なりにめあてを持って授業を進めていった。そして、授業の中で得た知識と技能をいかに全体に広めていくかに重点を置いて取り組んだ。

2 指導の実践

(1) 単元計画

時間	1	2～5	6
学 習 内 容	挨拶・準備・準備運動（チームごと）		
	◎オリエンテーショ ン ・活動内容を知る。 ・場の設定を知る。 ・きまり・安全面について確認する。	・「やってみよう」を行う。 ・いろいろな場を使って、短い助走、踏み切り、両足着地までの動きの流れを習得する。 ・動きのポイントを知り、声を掛け合う。	・幅跳び会 記録の測り方、ルールを確認し、楽しく競争できる場を選ぶ。 ◎単元全体の振り返り
	整理体操・片づけ・挨拶		

(2) 指導の工夫

○めあての持たせ方

授業を行う前日に活動内容を伝え、どんなことに気を付けて跳ぶのか考えさせた。そして本時で確認し、動きのポイントを伝え、実践させた。

○ポイントの声掛け

技能的に不十分な児童も見られ、模範となる児童、ポイントに気を付けながら試技を行っている児童を授業の中間で取り上げ、全体で共有し、ポイントの声掛けの指標とした。

○振り返りの充実

本時の振り返りの時間を確保した。感想カードには個人的にできなかったこと、次にやりたいことを書かせ、全体の前で発表し、次時の学習につなげた。



3 おわりに

児童は「わたしたちの体育」を所持していないが、活動全体の流れやポイントの声掛けなどの掲示物を工夫することにより、学習の見通しを持ち、意欲を持って学習に取り組んでいた。また、なかなか技能的に不十分な児童も、友だちの声かけにより上達していく様子が伺えた。また、低位の児童に対する配慮で、場を工夫したことも効果的であったと思う。

今後は、さらに児童の技能面、活動意欲の差が顕著に見られるようになってくることが予想される。それらをふまえながら「わたしたちの体育」の活用方法を検討していきたい。